



～浮世絵と江戸の玩具絵～

## 歌川派を作った男 歌川豊国

### 浮世絵界を独占した歌川派

幕末から明治にかけて、江戸の浮世絵界では歌川派という流派が一世を風靡した。浮世絵は一人一派の自由主義が主であったが、その中で歌川派は何人もの門弟を取り、何代もの継承が行われた異色の派閥であった。

歌川派は、江戸中期の浮世絵師歌川豊春が五人の弟子を取ったことが始まりとなる。特に歌川豊広と豊国は弟子を取り続け、豊広は「ヒロシゲブルー」で世界に知られる広重を、豊国は40人近い弟子を育て、その中の名手が更に弟子を取り、幕末の浮世絵界を歌川派で埋め尽くすほどの一大派閥へと育て上げたことで知られている。明治以降も開化風俗絵や新聞挿絵などで活躍を続け、昭和でも吉川英治の『鳴門秘帖』の挿絵で有名となった岩田専太郎など、多くの人物を世に出した。

この歌川派の一大派閥を築き、中興の祖と言われる歌川豊国の初代より3代までは、中野区上高田にある萬昌院功運寺に眠っている。

### 飛び双六

上の画像は、「飛び双六」と呼ばれる絵双六の一種である。「飛び双六」は、各コマに割り当てられている役者名と、サイコロの目が対応しており、そのコマに書かれた目が出たら、対象となる役者のコマに進めて、「上がり」を目指す遊びとなっている。

（初代歌川豊国画 『江戸の水まざる双六』 国立国会図書館デジタルコレクションより）



▲一鵬斎芳藤画 組上絵（立版古）「二十四孝狐火の景」  
素材提供：国立歴史民俗博物館 制作：中野区立図書館



▲萬昌院功運寺（2016年6月撮影）



▲歌川豊国初代～三代の墓（2016年6月撮影）

## 中野に眠る初代豊国

歌川豊国（1769—1825）本名 倉橋熊吉（後に熊右衛門）画号 一陽斎

歌川派の始祖である歌川豊春は、浮世絵に西洋画の遠近表現をより正確な形で取り入れ、浮世絵の風景描写に更なる進化をさせたことで知られる。彼の元で豊国は幼年期から学び、処女作を発表した天明6（1786）年より晩年まで作品を世に送り出した。

豊国は特に人物画を描き、初期には江戸時代の挿絵付きの読物、草双紙の挿絵や、美人画を描いていた。寛政6（1794）年に出世作である役者似顔絵シリーズ「役者舞台之姿絵」によって、役者絵の人気絵師として不動の地位を得ることとなった。同時に、美人画においても独自の画風を確立し、錦絵や同時代の作家、山東京伝や曲亭馬琴などの挿絵等、多岐に渡って活躍した。彼の特徴の一つとして、その時々で浮世絵に求められているものを自己の作品に適宜汲み取り、その時代に柔軟に対応した作品を生み続けたことが挙げられる。常に万人に求められる絵を描き続けた彼は時代の寵児として、その人気は同時代の絵師東洲斎写楽を圧倒することとなった。

一方で彼は多くの門人を受け入れ、歌川派という一大派閥を作りあげた。化政期（1804—1830）では浮世絵画の第一人者として、多くの人々を惹きつけた。その中には三代目歌川豊国となる歌川国貞、歌川派の更なる拡大を促し豊国に続いて多くの名手を生み出した歌

## 浮世絵版画 玩具絵

浮世絵は、大人のみならず、時には子どもたちをも夢中にさせた。それは子ども達から読書習慣すらも遠ざけたという。その浮世絵版画「玩具絵」の盛衰は、歌川派を始め、多くの浮世絵版画師たちに大きな影響力を持っていた。

「玩具絵」とは、別名「手遊び絵」とも呼ばれ、そのまま、あるいは工作したりして遊べる絵である。その遊び方は現代風に言えば、ペーパークラフトや脳トレ、メンコ絵など多岐に渡り、また錦絵による絵双六も「玩具絵」の仲間とされている。浮世絵が子ども達の娯楽に一役買い、時にその親も一緒に楽しませる、そんな存在となったのである。

「玩具絵」は、寛政年間（1789—1801）に江戸時代のペーパークラフトとも言つべき「組上絵（立版古）」が文献上に見られるようになる。以降、「玩具絵」の台頭は市場を大きく動かし、子供向けの読み物「赤本」が店から消え、書き手たちは大人向けの「黒本」、「黄表紙」へと移行し、その後子ども向けの読み物は明治まで日の目を見ることはなかった。

明治初期になると政府が教材として採用したため、「玩具絵」の需要は一層高まることとなった。加えて、西洋画を始めとした西洋文化の流入により、他の浮世絵需要は落ち、当時の歌川派絵師も含めた多くの技師が「玩具絵」へと流れていった。特に国芳の門人一鵬斎芳藤は、「おもちゃ芳藤」と呼ばれるほどの人気を誇った。

明治後期、歌川派を含む手摺り錦絵師と「玩具絵」は、頂点となった「おもちゃ芳藤」の没後、機械印刷の子ども向け絵本や読物の台頭によって、衰退の一途を辿っていった。現在では、「玩具絵」は江戸時代よりいかにして子ども達の心を捉えるか苦慮し、研究していたかを知る資料として注目を集めている。

▼初代豊国（野村文紹／著『肖像 02巻』国立国会図書館デジタルコレクションより）



川国芳など、以降の歌川派にとって重要な人物も登場するようになった。また、歌川豊国の名は、その後も襲名され続け、平成11（1999）年に六代目歌川豊国が96歳の高齢で近畿大学法学部に入ったことで話題となった。初代豊国は没後、江戸時代では現在の港区三田にあった功運寺に埋葬された。功運寺は大正11年に中野区上高田へ移り、以降豊国は中野の地で眠っている。功運寺は昭和23（1948）年に萬昌院と合併し、現在では萬昌院功運寺となっている。

## 浮世絵と錦絵

浮世絵は絵師が直接筆で描く肉筆画と、大量生産を目的とした木版画に大別される。特に版画は単色から始まり、明和2（1765）年に絵師鈴木春信らが創始した多色摺りで色彩を再現できる浮世絵版画「錦絵」が、その最終進化形態とされた。

～お知らせ～



展示期間：7月30日（土）～9月29日（木）  
展示場所：中野区立中央図書館 地下1階  
正面玄関前プチ展示コーナー及び  
正面玄関・大型図書コーナー前 各ガラスケース  
8月9日から館内でラリーを実施します。ご参加の方には、  
もれなく素敵な景品をプレゼントします。

～参考文献～

- 『國史大事典』國史大事典編集委員会／編 1979 所蔵：中央（禁）、野方（禁）、江古田（禁）、上高田
- 『朝日日本歴史人物事典』朝日新聞社／編 1994 所蔵：中央（禁）、東中野、江古田、上高田
- 『萬昌院功運寺史』萬昌院功運寺／編 1990 所蔵：中央
- 『図説浮世絵入門』稲垣進一／編 2011 所蔵：中央、本町
- 『浮世絵図鑑 江戸文化の万華鏡』安村敏信／監修 2014 所蔵：中央
- 『江戸明治「おもちゃ絵」』上野晴朗／編著 前川久太郎／編著 1976 所蔵：中央、本町